

歴史の
ぬちる里へ

永井路子

著者紹介

永井路子（ながい・みちこ）

1925年、東京に生まれる。

東京女子大学国語専攻部卒業。小学館編集部勤務を経て文筆業に入る。

1964年、『炎環』で直木賞受賞。1982年、『氷輪』で女流文学賞受賞。歴史に対する新鮮な解釈、確かな歴史考証には定評があり、1984年、「難解な史料を駆使して中世を扱った歴史小説に新風をもたらした」功績で菊池寛賞を受賞。1988年には、『雲と風と』で吉川英治文学賞受賞。

著書には、『歴史をさわがせた女たち』『異議あり日本史』『山霧』（以上、文藝春秋）、『女の修羅・男の野望』（PHP研究所）などのほか多数がある。

PHP文庫 歴史のねむる里へ

1993年3月15日 第1版第1刷

著者	永井路子
発行者	江口克彦
発行所	PHP研究所
東京本部	〒102 千代田区三番町3-10 第一出版部 ☎03-3239-6221 普及一部 ☎03-3239-6233
京都本部	〒601 京都市南区西九条北ノ内町11 ☎075-681-4431
印刷所 製本所	大日本印刷株式会社

© Michiko Nagai 1993 Printed in Japan

落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-569-56536-0

歴史のねむる里へ

永井路子

○ 本表紙図柄Ⅱロゼッタ・ストーン（大英博物館蔵）

○ 紋章Ⅱ上田晃郷

歴史のねむる里へ……目次

奈良

東大寺・秘められた皇后の悲願

11

古都のあけぼの

幸運のかげに

運命のまがりかど

血ぬられた王座へ

大仏開眼

飛鳥

香久山は畝傍^{うねび}を愛^おしと……

27

飛鳥路の旅は

なげきの女帝

幻の宮殿

愛と悲しみの川

謎の石たち

吉野

王朝の幻と謎を追って

39

大坂

幻の大寺

里の寺、山の寺

壺阪越え

吉野山にて

道長は山上に登ったか

滝の巡礼

秀吉をめぐる女人たち

63

大坂城物語

宿命の城

黄金のベッド

華麗な地獄図

却火はふたたび、三度^{みたば}

京都

古典文学に描かれた町

79

清少納言も歩いた道

近江(一)

兼好法師の見た紅葉
宇治は貴族の別荘地
建礼門院の心境

壬申の乱を旅する

93

脱出——近江から宇治へ

吉野の山ふところへ

大長征

近江(二)

近江観音寺城をゆく

祖母ヶ昔

六角氏の居城

みごとに立体的城下町

六角承禎の悲劇

姿を現わした幻の名城

箱根

箱根越え・山路の変遷

147

古くは日本武尊が越えた“碓日峠”

騎馬ギャング団のいた足柄道あしがら

女性には恐怖と危険の湯坂道

力士と芸人はフリーパスだった関所

鎌倉(一)

北条氏興亡の跡

163

血と権謀

城館とやぐら

山の道、海のだ

追憶と鎮魂

落日

鎌倉(二)

海辺の歴史散歩

179

十一面観音の伝説

鎌倉(三)

広重の描いた富士山

鎌倉入りの許し

駈込寺の女人たち

191

二つあった縁切寺

よくある二つの誤解

姑の嫁いびりも原因

駈込みの方法と順序

権威ある寺法書

寺内の待遇

寺を利用した女も

縁切寺の由来

鎌倉(四)

谷^{やと}をめぐる

213

山ふところの行きどまり

比企谷の惨劇

鎌倉の苔寺

花の谷、明月谷

鎌倉(五)

鶴岡八幡宮今昔

225

大公孫樹いぢよう

みつめてきた歴史の底

源頼朝の初詣で

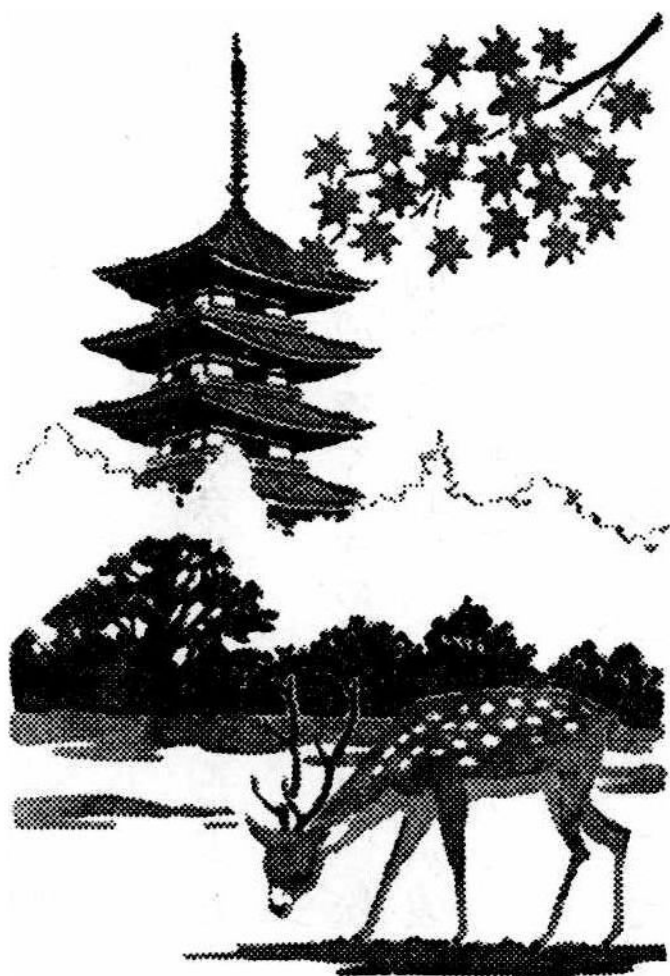
おうばんぶるまい

文庫版へのあとがき

本文カット・莢木祥之

奈良

東大寺・秘められた皇后の悲願



古都のあけぼの

音——ともいえない、かすかなものの気配^{けはい}で目をさました。奈良のホテルで朝をむかえたときのことである。夢かしらと、いぶかりながらカーテンをひいたとき、思いがけない訪問者を見た。人おじしない、やさしいひとみの鹿が二匹、じっとこちらをみつめていた。

——まあ、こんなところにまで鹿が……。

ついさそわれて外に出た。朝寝坊の私が、思いがけず、早朝の奈良を歩く気になったのは、この、かわいい訪問者のおかげだった。

町はまだ眠っていた。翡翠^{ひすい}色に静まりかえった池は、薄く濃く木立の影をうつし、松の梢を伝わって、かすかに読経の声が聞こえてくる。昼間のさわがしい「観光奈良」の表情は消えて、そのかみの「ならのみやこ」が、ふいに顔をみせた感じだった。

松の緑の中に、東大寺の南門が見えてきた。

そして、大仏殿の大屋根も——。バスやラジオ、マイクなどの騒音を一切^{いっさい}はぎとって静

まりかえる東大寺。その壮大さと威厳をこれほど膚に感じたことはなかった。早起きをしてよかったと思う。観光バスでいくつもの寺を走りまわるよりも、朝まだき、足にまかせてそぞろ歩きをするほうが、どんなに深く古都のいのちにふれることができるかわからない。

南大門をふり仰いだとき、私の胸に強く迫ってきたのは、ひとりの女性のイメージだった。東大寺を建て、大仏造立にいちばん力をつくしたその人の名は光明皇后こうみょうこうどう。第四十五代、聖武天皇しょうむのおきさき、“咲く花の匂うがごとし”といわれた華麗な奈良朝を代表するトップ・レディである。

じつをいうと、私は、その生涯のきらきらしさのゆえに、光明皇后というひとをこれまでに好きになれずにいた。が、この朝、緑の静寂の中で東大寺を眺めたとき、その華やかさの裏に秘められた、女としての苦悩が、突然、ひしひしと胸に迫ってきたのである。

幸運のかげに

光明皇后は、少女時代の名を安宿媛あすかひめといった。光明子こうみょうしともよばれたらしい。かわいい少

女だった。頭はよかったが、とびぬけて美貌でもなかったらしい。伝説では、光り輝くほど美しかったことになっているが、確実な史料には、美人だったとは一行も書いてない。幼いころ市へ行って商人たちに秤の使い方を教えたという。これも伝説にすぎないが、どうやら、ひっこみ思案の箱入り娘ではなくて、なかなか積極的な少女だったようだ。

父は藤原不比等。宮中で権力のある高級官吏。母の橘三千代も、文武、元明、元正と、歴代の天皇に仕える高級女官だった。いわば彼女は、地位にも富にもめぐまれた、ハイ・ソサエティのお嬢さまだったのである。

十六歳のとき、縁談が起こった。相手は同い年の皇太子首皇子である。願ってもないしあわせと、周囲の祝福をうけて、彼女は幸福な結婚へ――。ハイ・ソサエティの令嬢としては、まずまず順調な人生への門出だった。

十六歳の花嫁、花婿。ままごとのようにかわいく、きれいな新婚生活だったに違いない。そのころの奈良の朝廷といえ、豪華な中国風の建物だった。青い屋根、白い壁、赤い柱。しかも生活様式は椅子、テーブルでベッドを使っていたのだから、平安時代などよりはむしろ現代に似ている。そういえば、女の人も絹のスカートに絹の上着、ストールを巻き、ししゅうのある靴をはき、金や宝石のイヤリングやネックレス、ブレスレットをつける、というぐあいだから、現代そっくりだといってよい。

幸福のシンボルのようなかawaiiプリンセス！ が、この安宿媛の人生のスタートのそのとき、早くも小さな驕かげがつきまどっていた。このとき、すでに首皇子にはもうひとりのおきさきが、あったのである。

運命のまがりかど

もうひとりのおきさきの名は広刀自ひろとじといった。あがたいぬかいのから県犬養唐あがたいぬかいのからという官吏の娘である。この人は安宿媛の父不比等のような高級官吏ではない。このころ、おきさきが何人もいるのがふつうだった、とはいえ、安宿媛にとって、ゆかいなことではないはずだ。

しかも、そのうち、ライバルの広刀自がみどもってしまった。

——これは一大事！

シヨックをうけたのは、彼女よりも、むしろ不比等や三千代ではなかったか。

だいたい不比等は、天皇の姻戚いんせきになることで、ここまでのしあがってきた男である。彼の先妻の娘、宮子みやこは、さきに文武天皇のきさきになり、男の子を生んだ。これが首皇子である（だから安宿媛との結婚は、叔母と甥の結婚になるわけだが、当時はこんなことはよくあった）。